

月に眠る



広瀬 瑞記

壁のむこうに

わたしとあなたの間には壁があるのでしょうか。

わたしが「当たり前」と思っていることは、あなたにとっても「当たり前」のことなの？

当たり前。自分の中で、あることが馴染みのものとなる。それが「当たり前」。

最近、彼が側にいて話を聞いてくれるのが当たり前となった。テーブルを挟んでわたしの前に座り、熱心にわたしの話を聞いてくれる、答えてくれる。

その日もいつものように一緒に歩いて、同じものを見た。そしてここで最近の「当たり前」。彼から、お茶にしようと声をかけられてコーヒーを頼みお話をする。

口火を切るのは大抵わたしから。そのほとんどが彼をからかうもの。

——もう歳だから、すぐに休みたくなるんじゃないの

かなり生意気な口の利き方。はっきり言って挑戦的である。しかし相手はずっと大人。

——かなり歩いたからね、きみが疲れていると思ったんだ。それにオレも喉が渴いたからね

わたしの皮肉などまったくなかったかのような会話。かなり悔しい。反撃をしたい気持ちもあるものの、わたしもそこまで子供ではない。ここは大人らしく会話をするにしよう。そう大人らしく、落ち着いて。

——ありがとう。

日本語のこの曖昧な表現が好き。こんなことを言われた方としては、何に対して感謝をされているのか聞かざるを得ないってもの。会話って、結局こんなお互いの曖昧な表現を埋め合わせるように行なわれるための行為だと思う。

——どういたしまして。気分転換がしたかったし、きみが今日空いているのを前もって聞いていたからね。ところで、本当にあんなところで良かったの？

わたしの曖昧な表現はあっさり返された。「何が？」という答えが返ってくると思っていたのに。自分の期待している答えとは違うものが返ってくると、嬉しいという気持ちと、悔しいという気持ち自分が自分の中に出てくる。今回の場合は、間違えなく後者の「悔しい」だけ。

あんなところ。そう、実はお互いに特に行きたいところが思い浮かばなかったの、以前から気になっていた美術館に連れて行ってもらったのだ。

——ひとりで行ったほうがのんびり出来たでしょ。特に行くところがないからって、一人で行きたかったら、ひと・・

会話が途切れた。カフェのお姉さんが、わたしたちが頼んだアイスコーヒーを持ってきてくれたのだ。申し訳なさそうとは言えない態度でわたしと彼の前にコーヒーを置く。

彼はガムシロップ少量とミルクをいつも入れる。そしてわたしはいつも彼にそれを渡す役。

——はい。

この時ばかりは少し可愛い子を意識して、差し出す。すると彼はずっとわたしの目の前に、わたしが渡したガムシロップとは違うものを差し出した。

——あなたも入れるでしょ？

今日はいれない気分だった。入れない気分だったんだけど、彼のおっせかいというか、優しさというかその行動に少し嬉しくなってしまう、ガムシロップをおもむろにアイスコーヒーに入れる。グラスの中に入れられたばかりのガムシロップは、陽炎のようにもやもやとグラスの奥底に沈んでいく。そこをすかさずにかき回す。熱心にかき回す姿が面白かったのか、彼が笑った。

——本当に楽しそうだよ。

ただ、ガムシロップをかき混ぜるという行為。その行為を面白く見せるだなんて、わたしはかなりの役者かな？役者というよりは、かなりの能天気者か、もしくはピエロ。ちょっと抜けている部分があるのかもしれない。

——ただ、かき回しているだけなんだけれど、どこが楽しそうに見えるの？

ちょっと意地悪な返答だったかもしれない。しかし、疑問に思ったのだ。かき回す姿のどこが楽しそうなのかって。

——飲むのを楽しみにしていると言う感じかな。きみが真剣にやっても、楽しそうな雰囲気が見て取れるから、つい笑顔になってしまうんだ。

なんだ、なんだ。わたしはハチミツを舐める為に頑張ってしまう「くまのプーさん」と同じレベルですか。ハチミツを得ようと必死に頑張るんだけど、ちょっとドジな行動ばかりをしてしまうプーさんを可愛いと思っている女の子の心境と似ているのかな。わたしだって、こう見えて女。やはり異性の目は気になるもの。そんな異性にこんなことを言われてしまっては、こちらが困る。思われるのならば、動作が可愛いよりも、姿が可愛いであって欲しい。そう思うのは女の悲しい性なのだろうか。

——それって、わたしにとっては良い意味なのかな？

ちょっと恥ずかしいので間髪入れずに

——わたしって、こう見えて女じゃない。だから気になるのよ。

相手はそれでも無言の返答。もっと言わなくてはいけないのかと、決意をして彼の目を覗き込む。そこに映っていたのは何だか楽しそうな色。そう、彼はわたしがその後続ける言葉を理解している。理解しているけれど、あえて言わない。わたしに言わせたいのだ。なんて意地悪なのだろう。意地悪だけど、わたしが言わないことには始まらない。始まらないのではない。この言葉の駆け引きで負けてしまうことになる。負けるのはこの性分、嫌いなのだ。どんなことをしても勝つ、というよりも勝つまでやり続ける。それがわたしの信条。だから今回もこの戦いを投げ出すわけにはいかない。なぜなら、このゲームを仕掛けたのがわたしだから。

——何でわかってくれないのかな。コーヒーに飢えているように見えるよりも、コーヒーを飲むことを心待ちにしている姿のほうが可愛いでしょ。だから、あなたにわたしはどちらに見えたのか尋ねたの。

言ってしまった。かなり恥ずかしい。そうわたしは自分の感情をストレートに言葉や行動に表すことがとても苦手であり、また恥ずかしいのだ。ただ恥ずかしいだけ。違う。感情を素直に表現することが美德だと考えられないからだ。だから、こんな風に自分の気持ちを言葉にすることが恥ずかしくもあるのだ。

——どちらでも、オレにとっては可愛いと思えるものだよ。どちらにしたって『きみ』は『きみ』なんだから。

そして彼は続ける。

——その行動が好きだから、きみが好きという訳ではないんだ。きみの全てが好きなのであって、もっとはっきり言ってしまうえば、行動なんてどうでも良いんだよ。

以前にもそんな感じのことを言われた。

そう、それは髪の毛を切ろうかどうしようか悩んでいた時だ。

——髪を短くしても長くしていても、表面的なきみが変わるだけであって中身・本質的なきみは変わらない。もちろん、表面的なきみも好きだけれどオレが惚れているのは本質的なきみなのだから、髪の長さなんて関係ないものだよ。

アイスコーヒーの氷が「からん」と音を立てる。その音を聞いてコーヒーの存在を思い出したかのように、わたしはコーヒーを一口飲んで、

——恥ずかしいことを言うよね。わたしの外見だけでなく内面も好きだなんて。

相手はどうか分からないけれど、言われた方はかなり恥ずかしい。恥ずかしいからこんなことを聞いている。聞いていながらも恥ずかしいから彼の目は見れない。だからアイスコーヒーの中の氷をストローでいじりながら、聞いてみた。

——きみにとって恥ずかしいことかもしれないけれど、オレ自身にとってはそうではないんだ。ただきみの前で素直になれるからこそ言える事なんだよ。

彼の顔を見てもらえない。それでも彼は続ける。

——オレはきみに心を許しているからこそ、素直でいられる。素直でいられるからこそ、どんなことでも自分の思っていることを正直に言えるんだ。

そう言われたって、言われた本人からすれば、やはり恥ずかしい。

——どうしたの？顔の赤みがひかないよ？

それはね、あなたに言われた言葉の一つ一つが嬉しいのと同時に、恥ずかしいからだよ。

——暑い中に長い間居たからかな？日射病になってしまった？

わたしの心の内を知らない彼はわたしの目を、わたしの真っ赤な顔を心配そうに見つめる。何か変化があるかもしれないと一心不乱に試験管を見つめる学者先生のように。

——大丈夫。日射病じゃないから。

ちょっと明るめの声を出して、まずは一言。これで納得をしてくれれば良いのだけど。しかし、わたしの思いとは裏腹に、彼はさっき以上に心配そうな眼差しでわたしを見つめる。

ちがう、ちがう。彼はわたしのこの一言をわたしの意図とはまったく違う捉え方をしてしまったのだ。わたしが大の負けず嫌いという性格をよく知っている彼は、この一言がわたしの負けず嫌いから発生した言葉だと思ってしまったのかもしれない。

——本当に違うから。ただ、あなたの言ったことがとても恥ずかし・・・

わたしの言葉はあっさりとうわたしの口の中で消えてしまった。さっきアイスコーヒーを持ってきてくれたお姉さんが、早く帰って欲しいという眼差しをわたしたちに向けながら、コップに冷たいお水を注ぎ込む。そして、沈黙。

こういう沈黙を破る一言が難しい。何を話せば良いのだろう。「今日は暑いですね」なんて、沈黙を破る最適な話題の「天気」の話なんてしてしまえば、彼がもっと心配してしまう。

世の中には、自分のパートナーに心配をかけさせるのが趣味という人がいるようだが、わたしはそんな趣味を持ち合わせてはいない。だって、彼が何かを心配している表情を見るのが何よりも辛いことだから。もし、その心配の対象がわたしでなければ、(わたしであってもそうだけ)何とか取り除いてあげたいというのが、わたしの本当の気持ち。だけど、今回の心配の種をホイホイ蒔いてしまったのは、このわたし。本当にどうすれば良いのだろう。

わたしは助け舟を求める、藁にもすがりたい人。そっと彼の目を見ると、そこにはわたしが言いたいことを理解し、そして心配という色が消えたものがあった。ここでやっと思息。長いとも短いとも言える彼との関係。今回は的確にわたしの気持ちを理解してくれたようで、わたしとしてもとても嬉しい。つい笑顔になってしまう。

——その表情だと、少しは落ち着いたみたいだね。

はい、やっと思落ちてあなたの目を見れるようになりました。

——ありがとう。

思わず、ぼろりと言葉がわたしの口からこぼれ落ちた。これがわたしの素直な気持ちです。

——今日、2回目だよ。

——何が？

——“ありがとう”

ああ、という表情がさっきまで赤かったわたしの顔一面に広がった。

——さっきもそうだけど、本当にそう思ったから素直に言ったんだけど・・・

わざと語尾を濁して、彼へ言葉というバトンを渡すわたし。卑怯かもしれないけれど、でもこの場合、「会話」というゲームのルール違反になりませんか？

——わかってるよ。ただ、そんなに言われると・・・

彼からバトン返しを受けてしまいました。が、わたしに語尾を任せられても、また彼の思いを誤って判断しかねないので、このまま彼にお返ししてしましましょう。

——“言われると”？

一瞬、わたしから視線をそらし、自分の目の前に置かれたアイスコーヒーを見つける。氷山のように堂々としていたコップの中の氷はいつの間にか、ちょこんとコーヒーというプールで遊ぶ子供のように小さくなっていた。彼はそんな小さい氷をストローで遊んだあと、コーヒーというよりも、コーヒーの水割りとなったものをゴクリと一口。そして、一息ついて

——オレも恥ずかしいんだよ。

と、ボソリ。わたしに聞こえるか、聞こえないか位の小さな声。

なんだ、なんだ。恥ずかしいと思っていたのはわたしだけではないんですね。その事実が嬉しくて、ついにやりとってしまう。ただ、彼に見られてしまうと申し訳ないので、見つからない程度に、にやり。

——トウイーティを捕まえた時の猫のシルベスターみたいな顔はやめなさい。

やっぱり、見つかっていましたね。

——ごめんなさい。でも・・・

——“でも”？

でも、言いたいことが一つだけある。それは、「ねこたん」のシルベスターに例えられて少し笑ってしまいそうになったこと。

——“でも”。どうしたの。

——何でもない。

——“何でもない”はルール違反だよ。ちゃんと話して。いま、何を思ったの？

言わないことには、彼は許してくれない様子。そんなに怒っているような表情ではないけれど、わたしがこれ以上、黙秘権を行使したら、彼は心配してさっきの日射病の二の舞になってしまう。

——でもね、シルベスターなんて言っても、そのキャラクターを知っている人は少ないと思うし、わたしとしては・・・

——コヨーテが好きなんだよね。

ご名答。わたしはロードランナーとコヨーテのアニメーションが大好き。どんなにロードランナーにやられても不屈の精神で立ち上がるコヨーテ。そしてお決まりのオチ。そのすべてが大好きなんだ。

——でも、いまのにやけ顔はシルベスターだったよ。

彼からの釘刺し。

——はい、ごめんなさい。

猫のシルベスターのように、にやけていたのなら、大変失礼な表情をしていたのだろう。だから、今後はさっき以上に心を込めよう。

——本当に、ごめんなさい。

彼から返答が返ってこない。テーブルにつくか、つかない程度のところまで下げた頭をすっと起こし、彼と視線を合わせる。

——にやり

ああ、彼はわざと言ったんだ。恐らく最初の「ごめんなさい」でわたしの罪は償われていたのだろう。しかし、彼はわざと話の矛先を変えて、わたしにもう一度言わせるように仕組んできたんだ。悔しい。本当に悔しい。じたばたするくらい悔しい。

今回の会話の負けは素直に受け止めた方が良さそうですね、だんな。

ここでまた彼が「にやり」。わたしが負けたのが嬉しいのか何だか分からないけれど、恐らくさっきのわたし以上のにやり顔。やっぱり悔しいな。

これ以上、彼のにやり顔を見れないわたしはさっきまでコーヒーが入っていたグラスをじっと見つめる。コーヒーはいつの間になくなり、残っているのは氷だけ。そしてグラスは信じられないくらい汗をかいている。グラスの下にあるコースターもグラスの汗をすって、グラスの後がくっきりと残っている。

——そろそろお店を出ようか

わたしはそっとうなずくと、彼の後を追いかけるかのように急ぎ足でお店を出る。お店の外を一步出れば、そこは灼熱の世界。彼の横で、彼の歩幅に併せて一生懸命歩く。そうすると、いつの間にか額にはさっきのグラスのように汗が浮き出てくる。熱い。アスファルトが吸収した熱がわたしの足の裏を通じて、わたし自身の熱になる。

——熱い

静かな夜

「あっ、やべっ！」

急いでキッチンへ向かう。5分前まで大人しかったやかんが大きな声をあげて泣いている。いやいや、そんな生易しい声なんかじゃない。「叫んでいる」まさにそんな表現が似合うような大きな声で俺を呼んでいる。慌てて火を止める。そうすると少し機嫌を直してくれたのか声が落ち着き、注ぎ口から湯気だけが出ている。

「さて何を飲むかな」

洗い場にぼつんと置かれていたマグカップを水で簡単に洗い、何を飲もうか考える。考える？考えなくてもこの部屋で飲めるものはただ一つ。それがコーヒーだ。体には悪いかもしれないが、何でも濃い味が好きな俺はカルピスだって信じられないくらいの濃い物を作って飲む。例外なんて考えられない。こんな夜遅くに飲んでしまっただけは眠れなくなってしまってもいいが、今日の俺には関係ない。この気付け役が欲しくてたまらない、そう頭が言っているのだ。いつもと同じように棚から瓶を取り出してインスタントの粒々をスプーン小さじ5杯、マグカップに入れ、お湯を注ぎ、すべてが終わるはずだった。はずだったのに今日はいつもと違う問題が発生したのだ。

「熱っ！」

人間の反射神経の速さには本当に驚かされる。やかんの取っ手の熱さに驚いた俺の右手は宙を舞い、俺の右の耳たぶへと向かってきた。火傷をした時の有効な処置はただ一つ。蛇口からものすごい勢いで冷たい水を流し右手を冷やすが、ものすごく驚いた割には然程酷い状況ではなさそうだ。水のあまりの冷たさに右手の感覚がなくなりかけてきたので蛇口から離し、今度はふきんを使って左手でマグカップにお湯を注ぐ。スプーンでマグカップの中身をかき混ぜると、キッチン一帯から芳しい香りがそれまで殺伐としていた部屋全体に広がっていく。この香りを嗅ぐと、さっきまでささくれだった心が落ち着いていく。そっと洗い場にやかんを置いてリビングとは名ばかりのこたつの置いてある部屋へと向かう。

こたつの上にはさっきまで戦っていた書類の数々が所狭しと自分たちの存在を強調するように、重なり合っただけで置かれている。形ばかりの片づけをして、マグカップをこたつの上に鎮座させる。

「どっこいしょっと」

こたつの中に入りコーヒーをごくりと一口。そしてため息。マグカップの暖かさが自分の手を通じて俺の冷えた体を温めてくれる。

「さてと、どこまで書いたかな」

さっきまで俺と戦っていた相手を覗き込む。そこには「職務履歴書」と偉そうな字体で書かれた紙きれが1枚。俺の武器は鉛筆と消しゴム、そして万年筆。「ペンは剣より強し」なんて言葉があるみたいだけど、俺のペンは剣が云々の前に紙より弱いかもしれない。なぜなら、さっきからこの紙に向かっているのだが、ことごとく敗戦を規している負け戦のシンボルとして築かれたのが、こたつの周りの山というわけ。こんな紙きれ1枚程度に負け続けていては、面目が立たない。俺はもう一度鉛筆を握り、こいつに挑みかかる。まず1行。「2005年4月」と書き込んだ後、今勤めている会社名を書くともう一息。ここまでは順調、順調。自分が所属している部署名を書いてもう一息。

「困った、この後何を書けば良いんだっけ？」

今の会社に入社をして3年。入社したばかりの頃、俺がこんな紙きれと戦うなんて想像もしていなかった。想像もしていなかった相手との戦い。「今回きりであって欲しい」という気持ちを込めて、一つ一つの言葉を丁寧に思い出しながら書こうと向かい合うが、またしてもここで鉛筆が止まる。紙の方が圧倒的な有利の立場にいるらしい。俺の頭がどんなにフル回転をしても、こいつに勝つことは出来ないのだろうか。現状に納得が出来れば、こいつと戦う必要なんてないのに今の俺はこいつと戦っている。

ゴングが鳴り7ラウンドを戦いきったボクサーが疲れてコーナーに戻ってきて、まず水を求めるかのように、俺はコーヒーの温かさが恋しくなり、マグカップへと無意識で手を伸ばす。しかし、先ほどのやかんに引続きここでも問題が発生した。この部屋を象徴するように殺風景なマグカップは俺の手をすりと抜け、こたつの上に落ちるとコーヒーは己の存在を主張するかのよう一気に広がり、俺が今まで戦っていた紙きれはコーヒー色に染め上げられ、見るも無残な姿となって俺の前に現れた。今まで俺の癒しとして存在していたコーヒーは俺の浅はかな行動ゆえなのかもしれないが、俺を悩ませる原因の一つとなってしまった。

誰かが俺の側に居たらそいつにあたっていただろうが、いまこの部屋に居るのは俺一人。プツプツと独り言として文句を言っただけじゃない。こんな惨劇を生んだのは俺自身に問題があるからなのだ。身から出た錆。そんなものは分かっている。分かっ

ているからこそ、俺自身を腹立たしく感じて仕方がないのだ。キッチンへ急いでいるとは言えない程度の速さで向かい、ゴミ袋を持ってくるとかつて俺と戦っていた相手をゴミ袋へつつむ。そしてこたつの周りで大きな山を築いていた奴らも全て一思いにゴミ袋へ入れてやった。

また職務履歴書を書き直すことは造作もないこと。そんなことは問題とも思っていない。所詮相手はただの紙きれだから、どこかの文房具屋で購入してきて再戦を願い出れば良いだけの話。だから、書き直しなど何の問題でもない。そう書き直しなんて。

それよりも深刻なことは、今やかんで火傷をしそうになったり、コーヒーをこぼしたりしただけではない。会社で上司に身に覚えのないことで叱られたり、学生時代から付き合っていた彼女と別れたりと最近の俺が、ことごとくついていないということ。俺の何がこんなにも不幸を呼んでいるのか全くわからないが、何かけじめをつけなくてはいけないのかもしれないと思っているのだが、

「それが何が分かれば、簡単なんだけど」。

煙草に火をつけ、まずは一服。少し上の方に「ふ〜」と煙を吐く。煙はゆらゆらと天井近くへと昇っていき、そして「すっ」と消えていく。まるで俺のようだ。煙はゆらゆらと揺れながら、漂っていて誰も気がつかないうちに消えていく。俺も社会に漂っているだけの存在。そして会社でも俺は漂っているだけ。愛煙家の多い中で、この煙草の煙のように煙たがれるような存在であるということは、上司の言葉や態度から十分過ぎるくらい理解出来ている。だから、俺は「さっきまで職務履歴書という相手と戦っていた」と言えば、聞こえは良いかもしれないが、本当の所はただ現状から逃げようとしているのかもしれない。煙草の煙のように愛煙家の前からすっと消えることが出来ないから、俺自身の意思で消えようとしているのかもしれない。

気が付くと煙草は短くなっており、その火の熱さが煙草を握っている右の人差し指へ伝わってきた。灰皿で煙草の火を消し、天井を見上げる。そして、ゆっくりと目をつぶる。そうすると会社で聞かされる上司からの有難くない言葉や、彼女が別れ際に俺に言った言葉が頭の中で何度も何度も終わりなどないかのように響き渡る。その音はまるで、調律することを忘れられたピアノを子供が叩き弾いた音のように俺を飲み込もうとする。その状態から少しでも抜け出そうと無駄な努力かもしれないが、つぶった時と同じくらいゆっくりと目を開け、天井を見上げると、そこには俺に迫ってきそうな圧迫感を与える天井が俺を見下ろしていた。そしてどこからか吹きつけてくる冷気が俺を包み込む。

「俺はどうすれば良かったんだ？」

そう言うと、こたつの暖かさを求めてさっきよりも深く入り込む。答えなんて分かってる。分かっているけど、出来ないんだ。出来ない？違うだろ。俺は「出来ないからやらない」のではなく、「やりたくないからやらない」だけなんだ。会社での出来事だって、彼女との間にあったことだって。

闇はひたひたと俺に近づいてきて、一気に俺を飲み込む。蛍光灯の灯りなんて気休め程度でしかなく、その灯りは俺を助けてなんてくれない。何も見えない。何も聞こえない。誰もいない。そして闇は俺の耳元でこう囁く。自分の犯した罪を認め、償えと。

こんな夜はいつもより長く感じるもの。そんな時に俺を助けてくれる友人を俺はすっかり忘れていた。仕事の帰りに駅前のレンタルショップでDVDでも借りてくれば良かったと後悔をしてももう遅い。今日はいつもより冷え込みが激しいから、こたつから出ることも出来そうにないし。もしかしたら、こたつの中にいるのが一番の解決策なんじゃないだろうか、とすら思えてくる。

ふと、こたつからかなり離れた所に転がっている携帯電話が目に入った。俺はこたつから出ることなく、まるで猫のように器用に全身を伸ばして携帯電話を手にとると、メモリーの一番最初に書かれた相手へ電話をしようとする。

「また何やってるんだろ、俺」

最初に表示された名前は、つい先日別れたばかりの彼女。恐らく電話をしても怒らないだろう。怒らない代わりに嫌味を言われるか、もしくは哀れみを買うこととなりそうだ。俺も一応男だし見栄はある。昔付き合っていた女に同情してもらいたいわけではない。ただ、ただ誰かと話がしたい、声が聞きたいだけなのだ。闇に吸い込まれそうな俺をつなぎとめてほしいだけなんだ。

「俺って本当に友達少ねえな」

そんなことを考えていると、どんどん気持ちが落ち込んでいく。明日から2日間、まったく予定がないから、ずっとこの想いと戦っていかなければならないのだろうか？俺が使える武器なんて鉛筆くらいしかないのに、どう立ち向かっていけば良いのだろうか。自分自身が情けなくなって、握り締めていた携帯電話を放り投げ、こたつの中にごろりと寝転がると、自然と瞼が下りてきた。俺を愚か者だと照らしてくれた蛍光灯の光が瞼によって遮られていく。いつもなら歓迎しない闇も今日だけは歓迎をして迎え入れようかと、寛大に思ってしまう自分はやはり情けない男なのだろうか。

*

はっと目が覚めた。何があっただけで急に目覚めたのか全くわからないが、何か物音でもしたのだろうか。男一人の部屋なので強盗が入るなんてことはないと思うが、何が起こるか分からないのが、最近のご時世。少しは警戒すべきなのかもしれないと思い、耳を

すましてみる。

静寂。

何の音もしない。聞こえるのはいつもより早く打っている俺の心音、それと呼吸音だけ。いつもなら気になってしょうがない外を歩く人の声も、走る車のエンジン音すら聞こえてこない。俺だけ別次元の世界に飛ばされてしまったのだろうか。どこからも音がしない。俺が寝ている間に一体何が起きていたのだろうか。

暑くなったのでこたつを出て、外の世界を確認しようとカーテンを開け、窓の外を眺める。

「そういうことか……」

いつもなら闇に包まれた街は明日に備えてひっそり眠っているのだが、今日は少し違っていた。街がいつの間にか、暗闇と相反する存在だということを主張するように白く色づいていた。街をいつもとは違う雰囲気にした張本人たちは止むことを知らないのか、次から次へと舞い降りてくる。それは街灯のかすかな灯りを全身に受け、暗闇を振り払おうとするように。

窓を開けると目の前に見ることが出来る赤い郵便ポストはその色を潜め、街と一つに溶け込み白くなり、差出口は手紙を拒絶するかのように白い口を閉ざしている。家々のカラフルな屋根も、この時ばかりは己の主張などせず、自分のあるべき姿と化している。街を黒々と染め上げていた電線も、今日ばかりは街を真っ白に染め、いつもよりも重たそうに弧を描いて次の電信柱へ伸びている。道路には家路を急ごうとした犬の足跡らしきものが、「どうぞこの後を追ってきて下さい」とばかりに点々と残っているが、かなり激しく降ったのだろう、足跡とは名ばかりの穴だけが点々と続いている。

いつもとは違う街並みを隅々まで見渡し、夜の冷気と雪がもたらした、ひんやりとしてどこか爽やかな冷気をずっと吸い込んでゆっくりと吐き出す。冷えた空気が彼の肺に入り、彼自身を冷やす。ぶるりと身震いをすると、名残惜しそうに窓を閉め、部屋へと目を向けると先程役立たずだとばかりに投げ捨てた携帯電話があった。それまで存在を忘れていた携帯電話。気が付くと、足が自然にそちらの方へ動き出し、しゃがみ込んでそれを握り締める。そしてメモリーからある人物を見つけ出し電話をする。

呼び出し音を耳にしてはっと思う。もう寝ているかもしれない、と。

そんな不安をよそに思ったよりも早く相手が電話を取った音が聞こえ、声が聞こえてきた。

「こんな遅くに電話をしてくる親不孝者め！」

「俺、明日そっちに帰るわ」

「あら珍しい。休みでも取れたの？」

「いや……。明日と明後日だけ、だけど」

「そう。正月休みにも帰ってこないのに、一体どういう風の吹き回しかしら？」

「……いや。雪が……ね」